

①-4 熨斗瓦

熨斗瓦は459点が出土したが、殆どが破片資料であり信頼性の高い計測は困難である。製作方法としては、図-10の熨斗瓦のように平瓦の凹面側から切り込みを入れ、分割してから焼成していることが確認できる。

よって、熨斗瓦は以下の寸法として復元に用いることとする。

全長：・・・・・・36.8 cm (平瓦と同じ)

広端幅(弦幅)：・・13.2 cm (平瓦の1/2)

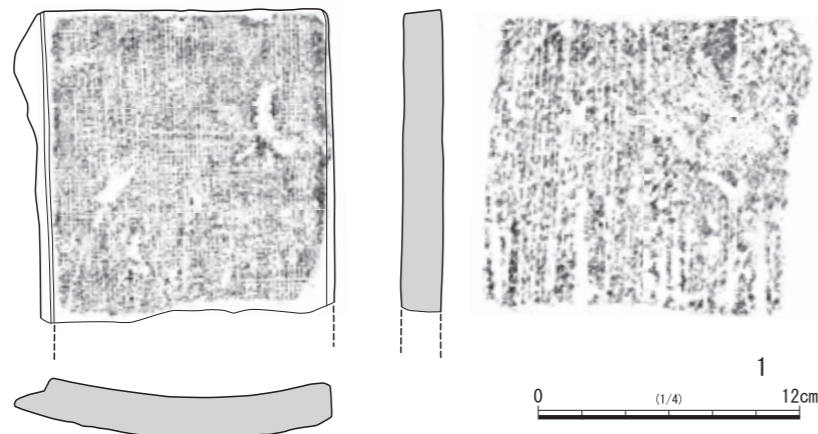


図-10 熨斗瓦

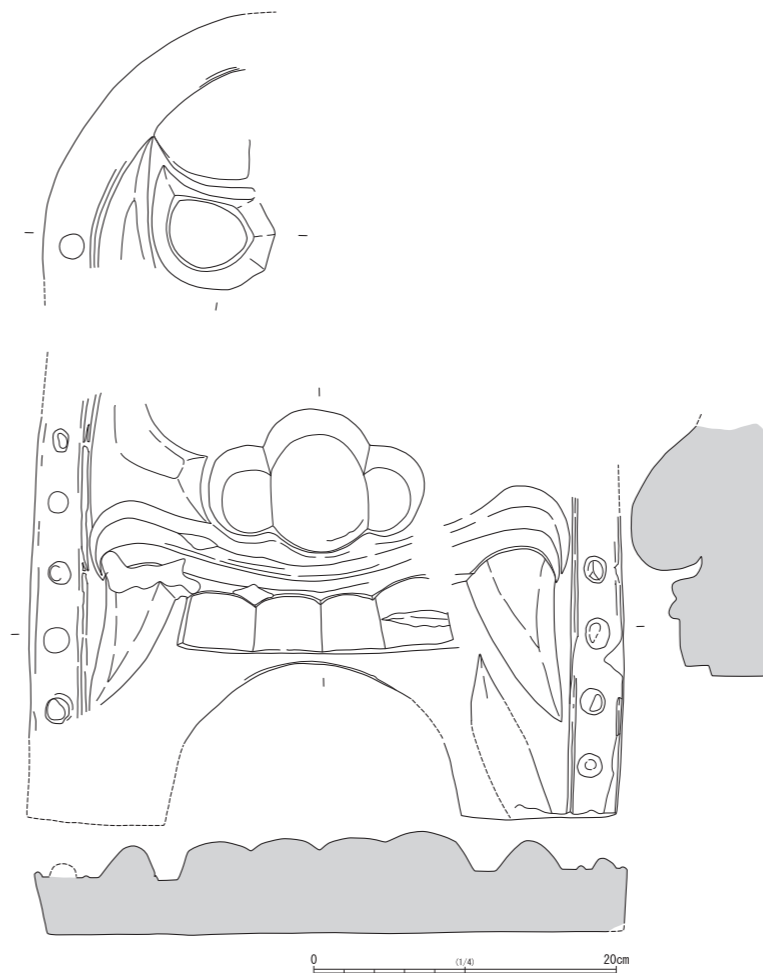


図-12 鬼瓦 A 型式



図-13 鬼瓦 A 型式 (写真)

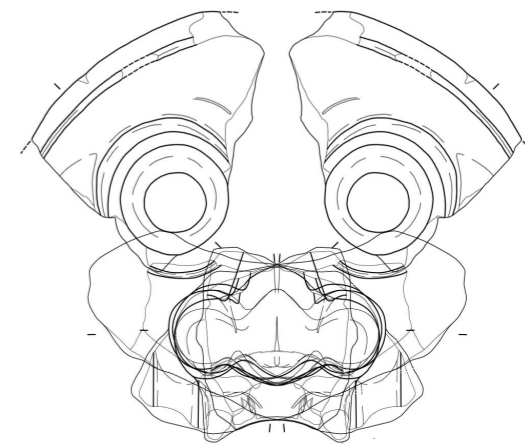


図-14 鬼瓦 B 型式

①-5 鬼瓦 (棟端飾瓦)

百済寺跡では、築地の隅想定箇所が神社地や道路になっているため、築地の隅棟に葺かれていた鬼瓦は確認できていない。しかしながら、地方寺院としては格が高かったと考えられる点から、軒瓦と同様に鬼瓦も葺かれていたと考え、鬼瓦全体から検討する。

鬼瓦は、66点が出土している。大半が破片資料で型式不明のものが多いが、型式がわかるものでは5型式に分類できる。うち鬼としての形相がわかるものは3型式(図-12～15)である。最も多くの点数が出土した鬼瓦A型式(図-12)では、鬼面の形相ももっともよく復元できるが、長さ44cm程度、幅38.9cmを測り大型の鬼瓦となる。

小屋について参考とした法隆寺西院南面築地の修理工事時に出土した若草伽藍出土の鬼瓦復元案では、幅28cm、高さ23cmであった(図-11)。難波宮跡では築地に葺かれたと考えられる鬼瓦が出土しているが、幅35cm、高さ25cmであり、築地に葺かれた鬼瓦は比較的小型のものであったと考えられる。

復元する隅棟に鬼瓦を設置するには、幅30cm程度となるものと考えられる。古代の鬼瓦は型づくりであり、軒の形態に合わせて外区等を削り取る形で大きさを調整しているが、A型式では計画寸法に鬼面の形相が収まらないため、計画寸法に収まりかつ形相の復元が可能なB型式(図-14)を採用する。なお、B型式で欠失した部分についてはA型式・C型式(図-15)を参考とする。推定する鬼瓦の面は図-16の通りである。

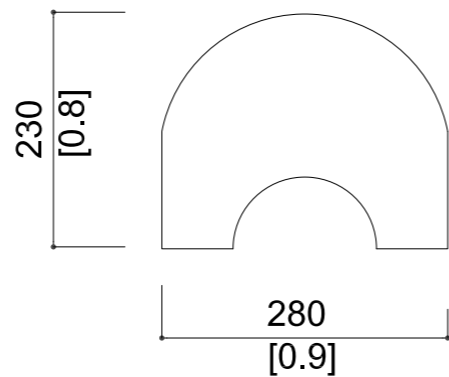


図-11 若草伽藍出土の鬼瓦復元案

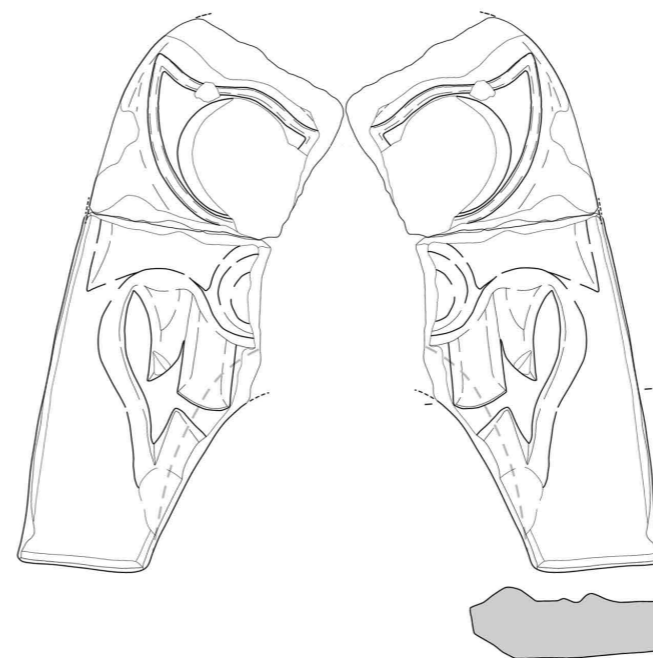


図-15 鬼瓦 C 型式

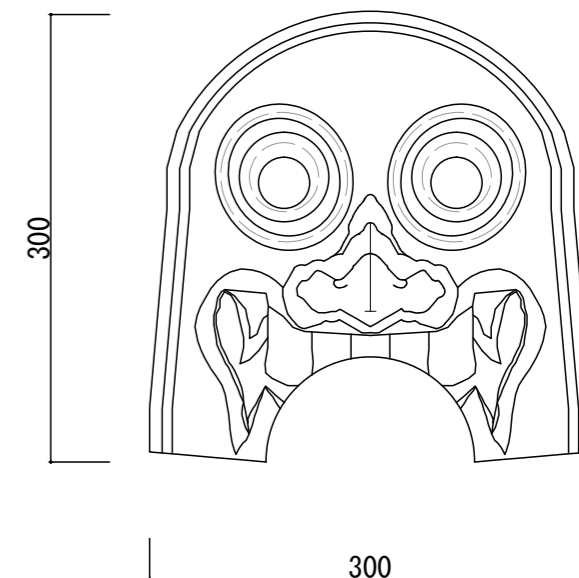


図-16 鬼瓦推定復元案
(B型式+C型式案)